

●生物多様性ふくおか指標（仮称）

○役割

- ◆『取り組み』の進捗状況を把握し評価する
- ◆ 取り組みの結果、「生物多様性の状況」や「利用の状況」がどういう状態であるか把握し評価する

評価結果の公表→意見聴取→その後の取り組みに反映

○指標作成の考え方

- ◆DPSIR 構造を使用
- ◆DPSIR 構造のうち、“知る”ための指標「状態 (S)」“取り組む”ための指標「対応 (R)」の2視点を重視し指標を作成

○DPSIR構造を使用する理由

OECD 等により提案され、現在、多くの生物多様性の議論の場で適用されているモデルで、日本の環境基本計画における総合的環境指標にも用いられている。

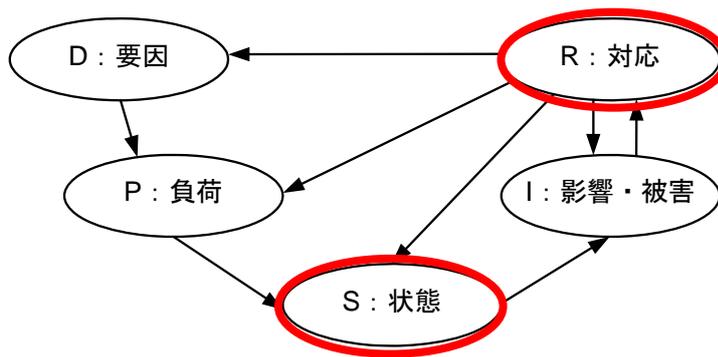


図3 人間活動と環境の関係を捉えるための DPSIR 構造

出典：EEA (1999), “Environmental indicators: Typology and overview” より作成

表 1 DPSIR フレームワークの指標区分

環境への負荷等の要因 (D : Driving force 又は Driver)	人口、経済、社会の発展、及びそれに伴うライフスタイル、消費のレベル、生産パターンの変化のこと。主要要因は人口増加と、それに付随する需要や人間活動の拡大。これらの要因は生産と消費の全レベルに変化をきたす。
環境への負荷 (P : Pressure)	人間活動による環境への負荷のこと。科学物質や廃棄物の放出、資源・土地の利用などによる負荷等。
環境の状態 (S : State)	土壌、空気、水等といった非生物的な状況や生態系、生息域、種、個体群、遺伝子といった様々なレベルにおける生物的な状況（生物多様性）のこと。
影響・被害 (I : Impact)	環境の悪化によって生じた、人間・生態系の健全性への悪影響や、資源利用、生物多様性自体に対する悪影響のこと。
社会的対応 (R : Response)	要因・負荷・状態・影響に対処する措置のこと。これらの対策は生息域内、域外の生物多様性の保全措置を含む。また、遺伝子資源の利用から得られる経済的あるいは非経済的な利益の衡平な配分を促進する措置も含む。さらに目標を達成するのに必要な因果関係の理解やデータ、知識、技術、モデル、モニタリング、人材、制度、法律、予算のための段階的措置も含む。

出典：平成 20 年度 生物多様性総合評価検討委員会（第 1 回）資料より作成

<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/shiraberu/policy/jbo/20-1/>

○「状態（S）」「対応（R）」を重視した理由

ふくおか戦略において、生物多様性の重要性を広く『社会への浸透』をさせることが初期段階の目標となっており、“知る”ことのできた多様な主体の“取り組み”が着実に進められることが将来像の達成に必要不可欠と考えられている。

※今回取り上げない「D 要因」「P 負荷」「I 影響・被害」についても、「S 指標」と「R 指標」の中で関連性を考慮していくことで、福岡市の現在置かれている生物多様性の状況を的確に表した指標を作成。

